

プラトンの美學（承前）

深田康算

四

プラトーンが「ゴルギアス」四七四に於て、美とは有用であるか快感を興へるかの孰れかに依つて規定せられる外に之れを説明する途の有り得ぬとを述べてゐるのは、前述の如く、一方に於ては「フィレブス」に見出さるゝ「其自ら美なるもの」の確立と恰も對角線的に矛盾するものであるとも見做され得る。さうして此個處に於ける辯論の主題は、總ての物が有用なるか快感を興ふるか此二つの中孰れかの標準に依つて決定せられると云ふ點にあるのであつて、身體や色や形や音や制度（風俗）や知識などの美が有用と快感との標準に依つてのみ定められるのだと云ふのは、一つの分り易き例證として引合ひに提出せられて居るのに過ぎないのであるからして、此個處ではプラトーンが確かに美を有用と快感との標準に依りてのみ規定され得るものと論斷してゐると見做すのは愈正當なる解釋であるかの如くに見える。併しながら第一

には斯く解釋することは、吾々に取つてさへあまりに明白なる矛盾をプラトトをし
て犯かさしめることである。「ゴルギアス」と「フィレブス」との著作年代を如何に隔た
りたるものと推定するにせよ、又對話的形式に於て述べらるゝ言説の劇的自由を如
何に極度に見積り得るにせよ、到底プラトトの名譽を傷けるとなくして吾々の許容
し得る範圍には屬しない。第二には此個處は、上に云つた如く、美を主題として論じ
てゐるのではなく、總ての物が有用と快感との標準に依つて決せられることを當面
の主題としてゐるのであつて美は唯その最も分り易き例證として引用せられてゐ
るのであるからして、其點から云へば、論理上、プラトトは此處では美を有用と快感と
の標準に依つて、さうして唯此二つ標準のみに依つて規定して居るのでなければな
らぬとも云へる。併し對話的形式に於て述べらるゝ言説に劇的自由を認めなければ
ばならぬとを吾々は此所で特に忘れてはならぬであらう。對話の進んで行く論理
上の方向は、必しも對話者の自由を束縛しはしない。束縛しない所に對話的形式の
本當の生命がある。パークレーやライブニッツやの哲學的對話篇に較べてプラト
トの其等が優つて居るのは恐らくは此劇的藝術的生命を有する所に存する。プラ
トトの對話篇の(必しも其總てに見出されるとは云へぬであらう)性質から考へて、對

話の或個處の主題と其論理的展開とは決して常に各對話者の自由なる發言を束縛するものでないことを吾々は豫想し得るのである。一般の規則として吾々はプラトイの對話論が對話であること、假令總ての場合に於て對話者が個性を示して居らぬとは云へ、それは決して一貫せる論理の階段を單に發聲する所の器械でないことを記憶すべきである。藝術的價值を有する對話と登場人物の性格に基く自由とを暫らく問題外に置くとしても、對話的形式に於ける論述が比較的により多く要求し得る自由の範圍は何人も承認しなければなるまい。殊に「ブレブス」に於ける引例的なる云はゞ餘談的なる言説に於て實は美に關する重要なるプラトイの一つの認識を見出したと考へる吾々は「ゴルギアス」に於ける恰も同じ様なる例證的若しく餘は談的言説に於て、又美に關するプラトイの他の一つの認識を豫期し得るのである。少とも吾々は「ゴルギアス」のこの個處に於ける美に就ての規定が例證的餘談的なる——對話篇に當然なる——形式に於て與へられてゐると云ふ事からして、直ちに此個處に於ける言説の價值を軽く視てはならない。「ブレブス」に於ける言説と甚だしき矛盾を示してゐることを不問に附する程軽く視てはならない。何故なれば之れを餘談的のものとして軽く視ることは、「ブレブス」に於ける言説をも同様な理由

で同様に軽く視るとでなければならぬ。さうして此兩者の間の矛盾を斯くして其儘矛盾として見做して置く程兩者を共に軽く視ることは一面に於てはプラトイの對話的叙述の藝術的性質を觀過することであり、一面に於てはプラトイの思想に論理の統一を否定し去ることであるからである。吾々は、さうであるからして、「ゴルギアス」の此個處に於ける美に就ての規定が「フィフブス」に於ける其れと相列んでや、り一つの重要な認識を吾々に與ふるものでなければならぬことを豫期し得る。さうして此豫期は「ゴルギアス」と「フィレブス」との夫々に現はれてゐる言説の表面上の甚だしき矛盾に依つて寧ろ強められるのである。此豫期は、併しながら、云ふ事もなく、此矛盾が表面上明らかなる矛盾であるに拘はず實は表面上のものに過ぎぬことの明らかにされた時始めて充たされ得る。吾々の豫期が如何に正當であるらしいにせよ、又豫期を裏づける矛盾が如何に強くあるにせよ、此個處の本文が少の牽強も附會もなしにさう解釋せられ得るのでなければ、吾々は一方に於ては吾々の豫期の充されぬことを認めるより外はなく、又他方に於てはプラトイに矛盾の存することを指摘するより外はないであらう。問題は其故に「ゴルギアス」の此個處に於ける言説が果して正當に「フィレブス」に於ける其れと矛盾せぬものとして解釋され得

るであらうかの點に懸る。而してそれは總ての古典解釋の場合に於けると同じく甚だ微妙なる問題であると共に、此の個處に就て特にさうであるのを私は感ぜざるを得なす。

併し、私を見る所に依れば、此個處はユ・リウス・ワルターに依つて綿密なる検査の下に極めて巧に解釋せられてゐるやうに思はれる。ワルターの解釋に従ふ時、此個處は第一には「フィレプス」と矛盾するものでないことが明らかにされ得るのみならず、其上なほ第二には寧ろ美の特性の新らしき一面が此所で始めて注意せられてゐることも亦明らかにされ得るやうである。 J. Walter, *Geschichte der Aesthetik im*

Altertum, S. 180-186.)

五

ワルターに従へば、此個處に於てプラトイがソクラテスをしてゴルギアスの弟子なるポロスに向ひ「身體の美の如きもやはり有用か快感か孰れかの標準に關係して始めて規定せられる」と云はしめて居るのは、單に當面の主題を論明する爲に、ポロスの常識的なる頭腦(ポロスが鋭敏なる頭腦の持主でないとは此對話篇を讀む者の知

つて居る所であらうに訴へる目的の下に、手近かなる例と分り易き分類とを借り來つたのに過ぎない。其故にソクラテスの此定義を其表面の言葉通りに取つて、有用と快感との二つの標準と云ふのを其儘常識的意味に於て言明してゐるものと解釋してはならない。寧ろ吾々は一方に於て此個處が對話の必要の上から常識的なる定義を表面上與へて居るのだと云ふ點を十分に考慮すべきであり、さうして他方に於ては此表面的淺薄なる言葉を通して其裡に——耳あるものには聽え目あるものには見ゆる所の——眞意を觀取することに努めなければならぬ。事實少しく注意して之れを檢査して見ると、此個所に於ては一面に於て當面の對話者に對する必要に應じて素朴的不嚴密なる用語と分類とが自由に驅使せられて居ると同時に、他面に於ては、美の特性に就てのプラトール自身の眞見解を顯示せしめ得る爲めに十分嚴密なる注意が用語と行文との間に拂はれて居る。其の證據には、一方に於て美は有用 *oφελεια* か快感 *ηδονη* か若しくは此の兩者かに依つて決定せられると云ひ恰も美とは其の自らに於いて美たるものではなく盡く皆快感か有用かの爲めに美たるのであると主張せられて居るかの如くであるが、他方に於いては明らかにポロスをして『美を快感と善とに依りて *ηδονη τὴ καὶ ἀγαθόν* 説明する爾の説明は誠に立派であ

る』(ゴルギアス四七五)と云はしめて居る。此所で「有用」の代りに其れの同義語であるかの如く不用意に之れと置き換へられた様に見える所の「善」と云ふ唯一つの語の荷なつてゐる重要な意義を(ワルター)に従へば吾々は觀過してはならぬ。此の一語の挿入あるに依つて吾々は有用の故に美と呼ぶるものはつまり善に外ならぬことをプラトイが認めて居たと斷定し得るのである。有用の故に美とせられるものは素朴的不嚴密には美と呼ばれて居り、さうしてそれが美なるものゝ一半を構成してゐると考へられはするが嚴密に云へばそれは善と呼ぶべきであつて美と呼ぶべきではない。さう云ふプラトイの眞意が此所でプラトイをして「善なる一語を挿入せしめたのである。ワルターに従て斯く解釋するならば「ゴルギアス」の此個處で與へられてゐる美の定義の少くとも一半は嚴密に云ふ所の美、即ち「其自ら美なるもの」に就ての定義ではなくして、明らかに單に「或他のものゝ故に美なるもの」に就て云はれた説明に過ぎない。さうして有用の故に美とせられる所の「或他のものゝ故に美なるもの」はつまり善に外ならぬとが明らかである。斯く解釋することに依りて、「ゴルギアス」の此個處に於ける美の定義は(少くとも其一半に於ては)實は何等『ファイルブス』に於ける「其自ら美なるもの」の確立と矛盾する所のないものとなる。

「ゴルギアス」に於ける美の定義は『其自ら美なるもの』を素朴的なる見地に立つて、暫く除外したのであり、單に『或る他のもの、故に美なるもの』に就て與へられて居るのに止まる。さうして此所では美が斯くの如く單に素朴的なる見地からのみ論ぜられて居ると云ふ事實は、此の對話の藝術的對話的要求に基くものとして理解せられ得るのであらう。

しかし此個處では、それと同時に、有用と快感と及び此兩者の結合との外に美を規定するものゝない事があまりに決定的に言明せられて居る。さうであるからして、若し有用の故に美とせられるものが『其自ら美なるもの』でないとするならば、『其自ら美なるもの』の原理は快感の爲めに美とせられるものゝ中になければならないこととなる。有用か快感かの外に美の標準はないと云ひさうして有用の故に美とせられものは實は美ではなくて善であること云ふならば美なるものとは快感の爲めにさう呼ばるゝもの、美の標準は快感に在ると云ふより外にはあり得ないこととなる。「ゴルギアス」の此個處の定義は、さうであるからして、其一半に於て假令「フィレプス」の規定と矛盾せぬことが上述に依りて明らかになつたとしても、其他の一半(さうして此二つの孰れかより外に美の標準はないと明言されて居る)に於てそれが快感の

爲めに快感の故にと云ふ標準を脱し得ないとすれば、之れも亦明らかだに『或他のもの』故に美なるもの』に外ならないであらうからして、やはり又『フィレプス』の規定と矛盾しなければならぬであらう。此の難點をワルターは次の様にして切抜けることに依りて、一方に於ては此の個處の言説が遂に『フィレプス』の其れと矛盾せぬことを明らかにし、其上他方に於てはプラトンの美に就ての他の一つの重要な認識を導き出さうとして居る。彼に従へばポロスがソクラテスに向つて『美を快感と善とに依りて説明する爾の説明は誠に立派である』と云つてゐる賛辭は、其の語調の上から、決して吾々をしてソクラテスの説明の正當なることを思はしめる如きものではない、寧ろ吾々は此所でプラトロンが美の説明は決して快感と善とに依りて與へらるべくもないことを暗に洩らしてゐることに氣が附かなければならない。ポロスの賛辭は *sanktionierend* ではなくして寧ろ *Verdächtigtend* である。ポロスなる登場人物の口から發した肯定的賛辭の裡から吾々はプラトロンなる作者の否定的意見を味讀しなければならぬ。さうして斯くの如くにして先づ吾々は『ゴルギアス』に於ける美の定義が其全體に於て——有用に依りて規定せられる一半と快感に依りて規定せられる一半との兩方に於て——實は美の、若しくは『其自ら美なるもの』の定義ではない

ことを知らなければならぬ。美を有用と快感とに依りて説明しようとする此定義は、「フィレプス」に於て『其自ら美なるもの』から明瞭に峻別せられた『或他のもの』故に美なるもの』に就てのみ語つて居るのであり、従つて其故に此定義は「フィレプス」に於ける其れと矛盾しないのである。

唯併しながら夫れでも尙一つの難點は明らかに除去せられずに残つて居る。「ゴルギアス」に於ける美の定義は有用と快感とを擧げてゐるに止まらず、此二つの標準より外にはないことを決定的に言明して居るのである。上述に依つて此個處が「フィレプス」と矛盾せぬことの明らかとなると共に、若しさうならばさうして其れ丈けに止まるならば、美の規定は何處にも見出されないと云ふことにならなければならぬ。『ゴルギアス』に於る定義の全部を『或他のもの』故に美なるもの』に關するものと見做す解釋に依つてワルターは、一方に於て巧みに「フィレプス」との矛盾を除き去得ると同時に、其れ丈けでは「ゴルギアス」に於ける定義が已に美の全部に就ての其れであると同言せられてゐる以上『其自ら美なるもの』に就ての規定をも包含しなければならぬと云ふ論理上の要求に、他方に於て矛盾しなければならぬのである。さうであるからして若し此難關を切抜ける途があり得るとすれば、それは有用のた

めにが、快感の爲にか此二つの孰れか一方に向て其中に『其自ら美なるもの』の規定を見出すより外にはない。而してワルターは又恰も此途を開いてゐる。ワルターに従へば、プラトンは此個處に於て有用の爲に美なるものに就ては明瞭に有用であるものゝ故に、美 *kosos tobro naia* と云ふ云ひ現はし方をも用ゐて居るのに反して快感の爲に美なるものに就ては「フィレプス」に於て用ゐられてゐる此故に、*kosos* なる語を明らかに故意に避けて快感に従つて *katu yidowip tana* とか快感に依りて *Sai yio jin tuu* 等の如くに一般的なる語を用ゐて居る。さうして美は快感の故に、美であるとか考へる素朴の見解に對して、快感は美の目的ではなく唯其直接的隨伴であるを示すために、依りて又は従つての語を用ゐて、嚴意に用語の上に於て區別して居る。有用の故に美なるものは、有用が美の目的であり、美は有用の標準に依つて規定せられる。併し快感に従つて若しくは快感に依つて美なるものは、快感が美に伴ふとを云ひ現はす丈けである。「ゴルギアス」の此個處に於ては當面の對話の主題の上から云つて、「フィレプス」に於ける如くに『其自ら美なるもの』と『或他のものゝ故に美なるもの』との區別が嚴密に確守せらるゝ必要はない。従つて此所で美は有用なるか快感を興ふるかに依りて定められると云はれてゐるのは、有用なる故に、若しくは快感を

與ふるが故にと云ふ嚴密なる意味を以て云はれてゐるのではない。有用に從つて若しくは快感に從つて美なるものなど云ふ用語も之れと同時に混用されて居る。美は有用なるか快感を與ふるかに依りて規定せらるると云ふ定義は、さうであるからして對話の流れの上に於ては云はば故意に曖昧に残されて居る。それは第一には美とは有用なる故にか若しくは快感を與ふるが故にか美となるのであるとも取られ得る。第二には美とは有用であるに從つてか若しくは快感を與ふるに從つてか美であるとも取れる。さうして又第三には美とは有用であるが故に美となるか若しくは快感を與ふるに從つて美なるかであるとも取られる。此の孰れの意味に取るべきかは此個處の對話の必要の上から云へば必しも重要ではない。此所では唯單に總てのものが有用か快感かの標準に依つて價値を定められると云ふことさへポロスに吞込ませればそれで目的は達するのである。其れにも拘はらず有用なるに依りてと云ふ場合には故になる語を必しも避けて居らぬに反して快感を與ふるに依りてと云ふ場合には故になる語が飽くまでも避けて居る。さうして上に述べた如くに有用なる故に美なるものは善に外ならぬとせられ善と快感との標準に依りては美は規定せられぬであらうことが暗に洩されて居る。さうであるから

して、プラトーンが有用の故に。若しくは快感の故に。美なるものをは『或他のもの』に故に美なるもの』に外ならぬと見做して居ること而して快感に依りて。若しくは快感に従つて。美なるものの中に『其自ら美なるもの』を認めてゐると云ふことは明らかである。換言すれば『ゴルギアス』に於ける美の定義の一半即ち有用を標準とするものは『或他のもの』に故に美なるもの』に就て若しくは善に就ての其れに過ぎない。さうして其の他の一半は、それが快感を目的とし快感の故に美であるとせらるゝ限りやはり『或他のもの』に故に美なるもの』に外ならないけれども快感の標準に依つて定められると云ふことを單に快感が直接に隨伴することに依つてと解する場合に於てのみそれは正當に『其自ら美なるもの』の、若しくは美の、規定とせられ得る。美が其れの故に美となると云ふ意味に於ては快感は美の原理ではあり得ない。併し美が其れに依りて美であると云ふ意味に於ては快感は美の原理であり得る。前者於ては快感は目的であり、その充たされた時始めて美となる。美は快感の故に美なるものとなる。後者に於ては快感は目的ではなくして美に必ず伴ふ所の直接の結果である。之れの伴ふことに依りて美であることが吾々に知られる。美は快感の故に美なるものとなるのではなく其自ら美なるのであり、而して快感の伴ふこと

に依りて美なるものなのである。此意味に於て吾々は快感は美の實在理由ではないが其の認識理田であるとも云へるであらう。

快感と美との關係をプラトニーが斯く見做してゐたと解釋すると出来る。すれば「ゴルギアス」に於ける言説は「ブレイプス」に於ける其れと矛盾するとの全くないものであり、又プラトニーは決して美の少くとも一半が快感の標準に依りて規定せられると考へてゐたのではないことが明らかとなる。寧ろ總ての美は其直接の結果として快感を伴ふと云ふことが此所に於て確立せられて居る。加之ワルターに従へばプラトニーは尙進んで美に伴ふ快感が如何なる性質のものであるかをも此個處で明瞭に指摘して居る。美に就てのプラトニーの他の一つの重要な認識が此個處で吾々に與へられて居るといふのは即ちそれを指すのである。さうしてそれは次の言葉に於て見出される、

『例へば身體が美であると云ふのは、それが或必要に適ふことに依りて有用である故にか若しくはそれが觀照に於て觀照者に快感を與へるかに従つてさう云はれるのである』(『ゴルギアス』四七四) *κατὰ νόον η̄ τὰ σώματα, εἰς ἐν τῷ θεοσκόπειαι καίσεαι τῶν τοῦ θεο*

さうして「ワルター」は之に關して大要次の様に述べて居る。——「觀照に於て觀照者に快感を與るもの」を其れの對照たる「或他の結果の故に美なるもの」若しくは「有用なるもの」に對立せしめて居る此個處の語調の上から見ても、觀照に於て觀照者に快感を與へると云ふのは他の結果や關係からではなく單に觀照に於て快感を與へる若しくは觀照しつゝある間に已に快感を與へると云ふ意味なることは明らかである。而して「有用なる故に美なるもの」は善に外ならぬのであるからして之れを除外すれば美なるものとは唯快感を與へるに依りて美なるもの丈けでなければならぬ。故に美とは即ち觀照に際して己に快感を與へるもの、若しくは單なる觀照に於て觀照者に快感を與へるもの *Was schon in der Betrachtung, oder in blosser Betrachtung dem Betrachtenden Freude bereitet*, と云ふことに依つて規定せられる。觀照若しく考察 *Bewusstsein*, *Betrachten* なる語は此所で偶然に使用せられてゐるのではなく美に對する精神の態度は理論的 *theoretisch* であるが故に此語が特に用ゐられたのである。觀照 *Sehen*, *Sehen* は考察若しくは觀照 (*Betrachtung*) の一種であり、プラトンは此語を好んで美的捕捉 *aesthetische Auffassung* を指すに用ゐて居る。且つ又觀照に於て若しくは觀照しつゝある間に觀照者に快感を起さしめると云ふ嚴密なる云ひ現はし方は術語的臭味を十分に

帯びて居る。さうであるからしてプラトーンが此の定義を下すに當つて美の現象が顯然として彼の目の前に立つてゐたこと、さうしてプラトーンをして美の本質的なる一つの規定を攫かみ出さしめたことは疑ふべくもない。而して此定義は概念上全く「フィレプス」に就ける「其自ら美なるもの」と相一致する。其自らさうして常に美なるものは、さうして其れに特有なる快感を伴ふものとは、云ふ迄もなく明らかに「其れが觀照せらるゝ時觀照者に快感を起さしめる所のものでなければならぬ」。「フィレプス」と「ゴルギアス」とに於ける兩者の説述の間に存する唯一の相違は「ゴルギアス」に於ける其れが積極的に定義を與へてゐる點に於て優つてゐると云ふ丈けである。蓋し「フィレプス」に於ては單に例に依りて暗示されてゐるに止まつてゐること——美の捕捉は觀照的(若しくは考察的)精神活動であること——が「ゴルギアス」に於ては明瞭に言明せられてゐるからである。併し又一方から云へば、快感の惹き起さしめられる爲に觀照が必要であるとすれば觀照が其れに向ふ所の「客觀的に美なるもの」が快感とは別にあるのでなければならぬ。快感に依りて始めて美が美となるのではあり得ない。此點は『ゴギアス』には見えてゐない所の「其自ら美なるもの」なる術語に依つて「フィレプス」に於てより善く云ひ現はされて居る。(J. Walter, Geschichte der

664 Aesthetik im Altertum, S. 182-183)

六

「ゴルギアス」の此個處と「ピレプス」の個所との比較に依つて吾々が尙學び得べき事柄へ進む前に、此所で念の爲め「ゴルギアス」の此個處の英譯 Jovett と獨譯 Schleiermacher とを掲げて置かう。ワルターの解釋の個々の點例へばボロスの贊辭に潜んでゐると云はれる否定的反語的意味や同じ所に見えてゐる善と云ふ一語に依ての解釋やに關して起り得べきかと私の懸念する疑問若くは異説に就ては特に論及する必要はあるまいと思はれる。是等の個處のワルターの解釋は多少あまりに巧みに過ぎると云ふ感を與へぬでもない。併し重要な點はワルターが美に伴ふ快感の規定を此個所に見出した所に在る。

Socrates. Let me ask a question of you : When you speak of beautiful things, such as bodies, colours, figures, sounds, institutions, do you not call them beautiful in reference to some standard : bodies, for example, are beautiful in proportion as they are useful, or as the sight of them gives pleasure to the spectators ; can you give any other account of personal beauty ?

Polus. I can not.

Soc. And you would say of figures or colours generally that they were beautiful, either by reason of the pleasure which they give, or of their use, or of both ?

Pol. Yes, I should.

Soc. And you would call sounds and music beautiful for the same reason ?

Pol. I should,

Soc. Laws and institutions also have no beauty in them except in so far as they are useful or pleasant or both ?

Pol. I think not.

Soc. And may not the same be said of the beauty of knowledge ?

Pol. To be sure, Socrates ; and I very much approve of your measuring beauty by the standard of pleasure and utility.

(Jowett, *Dialogues of Plato*, Vol II, P. 358—359)

Sokrates. Wie aber dies ? Alles schöne, wie Körper, Farben, Gestalten, Töne, Handlungen, nennst du das so ohne irgend eine Beziehung auf etwas schön ? Wie, zuerst schöne Körper, nennst du die

nicht entweder in Beziehung auf den Gebrauch schön, wozu jeder nützlich ist? oder in Beziehung auf eine Lust, wenn sie beim Anschauen den Anschauenden ergötzen? Weisst du noch ausser diesem etwas anzugeben über die Schönheit der Körper?

Polos. Ich weiss nichts.

Sokrates. Und nennst du nicht eben so Alles andere, Gestalten und Farben entweder einer Lust wegen schön, oder eines Nutzens wegen, oder beider?

Polos. Ich gewiss.

Sokrates. Nicht auch die Töne und alles was zur Tonkunst gehört eben so?

Polos. Ja.

Sokrates. Und gewiss, auch was in Gesezen und Handlungsweisen schön ist, ist es nicht ausserhalb dieser Beziehung, dass es entweder nützlich ist oder angenehm oder beides?

Polos. Mich wenigstens dünkt nicht.

Sokrates. Eben so ist es wol auch mit der Schönheit der Erkenntnisse?

Polos. Freilich, und sehr schön erklärst du ezt, Sokrates, indem du das schöne durch die Lust und das gute erklärst.

(Schleiermacher, Platons Werke, II, 1. Bd, S. 52—53)

正誤。本論文の前稿(第五卷第四十七號九年二月一日發行掲載)中四一頁六行以下八行に至る文章は誤解を惹き起し易いやうに思はれるからして、次の如くに訂正する。圈點を施したる部分は改定若しくは補充した語句である。

「フイレブスに於てたゞ一度極めて嚴密なる形式の下に確立されてゐる其自ら美なるものをプラトンは他の個處に於ては、或は未だ考へ至らなかつたか、或は全く見失つてしまつたか、或はさうして「ゴルギアス」に於ては美を規定する最も低級なる立場にさへ立つてゐるのであると云ふべきであらうか。

もとの儘では、「フイレブス」が「ゴルギアス」よりも前に出來上つた對話篇であると私が思ひ避ひしてゐるかのやうにも取られるであらう。

尙序ながら前稿に於ては *προς τὴν ἑξῆα* を『或他のものの爲めに美なるもの』と譯したのに、此回に於ては之れを『或他のものゝ故に美なるもの』と譯した。意味は變はつたのではない。——